

## 『政治教育講話』

田澤義鋪 著

新政社 [刊]

1926年9月 四六判/240頁 図書番号 OE-0259

「青年団の父」ともよばれる田澤義鋪は1885（明治18）年、佐賀県藤津郡鹿島村に生まれた。東京帝国大学卒業後内務省に入り、静岡県安倍郡長、明治神宮造営局総務課長、神社会第一課長を歴任する。郡長時代には農村青年の教育と青年団の育成に尽力し、明治神宮造営に際しては全国青年団による勤労奉仕を提唱して大きな成果をあげた。こうした青年運動と併せて政治教育にも積極的に携わり、1924（大正13）年「新政社」を創立、政治教育雑誌『新政』を発刊する。本書は「政治教育運動の輪廓」と題する『新政』誌上の連載を書き直したものであり、田澤の政治教育論としては、まとまった最初のものである。

1925（大正14）年の普通選挙法の施行により、有権者数はそれまでの数倍に激増した。政治の腐敗を救済するには国民への政治教育が不可欠と考えていた田澤は、この機会に「純真であり、無垢であるべき新有権者」を啓蒙すべく、さらには「政治に対する興味を失ひ、政治に無關心であり、甚だしきは之を忌避せんとする者の多いわが國民」を政治に引き寄せるため、本書を執筆した。

序文においても、刊行の目的を「本書によつて、幾分なりとも達成したいと思つた目標は、現在の政治の腐敗と墮落とを救はんが爲に、政治が如何に行はるるのが、その正常の道であるかを考へ、今の多くの國民の誤れる政治思想を正しうし、その政治道徳の一新を促さんとする點にあつた」と述べている。

田澤によれば、「政治の腐敗と墮落」を招く要因は、すなわち「政党の弊害」と「選挙界の悪弊」であった。既成政党を「人間の良心と理性とを基礎とする政策本位によらずして、利害と感情とに基く勢力本位によつて打ち立てられてゐる」と評し、打算や利害から対立と離合集散をくり返す姿勢を批判している。

選挙については、その「悪弊」として4つを挙げている。第1が「官憲の干渉」であり、「選挙の不正を取締るべき官憲が、之に壓迫干渉を加ふるの實例が極めて多い」と述べている。第2が「國民の封建的事大思想」で、これは「自ら正しいと思ふ方に投票しないで、どちらが多数を取り得るかを観測し、その多数であらうと思ふ方に投票する」ことだとしている。第3は「憐れつばい調子で選挙人の低級な同情を買はうとする」「情實因縁、哀訴嘆願の選挙」であり、第4が「選挙費用の多額」である。

こうした状況を改善するため、田澤は若い世代を中堅とする政治教育団体の結成を提唱している。青壮年による教育団体を各地方に結成し、これらが国民への政治教育運動や選挙肅正にあたることで「現在における情けなき政治の腐敗を、その根底より救ふことができる」というのが、田澤の考えであった。田澤自身も1924（大正13）年「理想選挙」を掲げて衆議院議員選挙に立候補し（結果は次点）、1937（昭和12）年には選挙肅正中央連盟理事長に就任している。

なお、田澤義鋪関連の資料として、本館では他に『自治三則』（OA-0488）、『道の国日本の完成』をはじめ主な著作を集めた『田澤義鋪選集』（OA-0793）を所蔵している。

（井上学・市政専門図書館司書）